コスモス　7月号

第72巻　第7号

◆宮柊二カレンダー（64）七月の歌

枇杷剝けば汁（つゆ）したたるを床の上ゆ眼放（まなこはな）たず父が待つなり

『多く夜の歌』

この歌をふくむ「半歳抄」の一連は大半が昭和33年に詠まれたと詞書にあるが、昭和34年に父は亡くなられている。病状の進んだ父は幼子のように柊二の剝く枇杷から目を離さずに待っている。その描写からは、病む父の存（なが）えようとするむき出しの命が感じられる。また子供に返り、長男の柊二を頼り切ったような父を哀しむ柊二であっただろうとも思わせられて切ない。

（大西晶子）